

愛媛県西予市におけるナベヅルのため池、冬期湛水田の利用について

○伊藤加奈(公益財団法人日本野鳥の会)、楠健明(宇和コウノトリ保存会)、松田久司(NPO法人かわうそ復活プロジェクト、日本野鳥の会愛媛)、源琢哉(西予市)

ナベヅル、マナヅルの現状

ナベヅルおよびマナヅルは、北東アジアに生息する絶滅のおそれのあるツル類で、鹿児島県出水(いずみ)地方を世界最大の越冬地としている。世界の推定個体数の約9割のナベヅル、5割のマナヅルが出水で越冬しているため、集中化による感染症発生時のリスクや農業被害等が問題となっている。このため、出水以外で越冬環境を増やすことが緊急の課題となっている。



ナベヅル(上)、マナヅル(下)

- ・推定個体数: ナベヅル 約 16,000羽
マナヅル 約 6,000羽
- ・分布:(繁殖地)ロシア、中国、モンゴル
(越冬地)日本、韓国、中国
- ・IUCNおよび環境省レッドリスト:
絶滅危惧Ⅱ類(VU)

越冬地では、主に水田を利用し、穀類の落ち穂や植物の種子、昆虫、小型の水生生物を食べる。基本的に家族単位だが、数十羽の群れで行動することもある。夜間は、水深10~20センチ程度の河川の中州や干潟の干出部、湿地、ため池等でねぐらをとる。



宇和盆地(宇和町)の位置



宇和盆地(ツルの渡来エリア)

愛媛県西予市について

愛媛県西予市の宇和盆地は、県内でも有数の稲作地帯で、約130のため池を有している。ほぼ毎年ナベヅルまたはマナヅルが渡来するが、短期間の利用が多い。

かつて池干しが行われていた頃は、水位が低くなったため池をツルがねぐらとして利用していた。

また、コウノトリも渡来し、ため池を餌場として利用する。

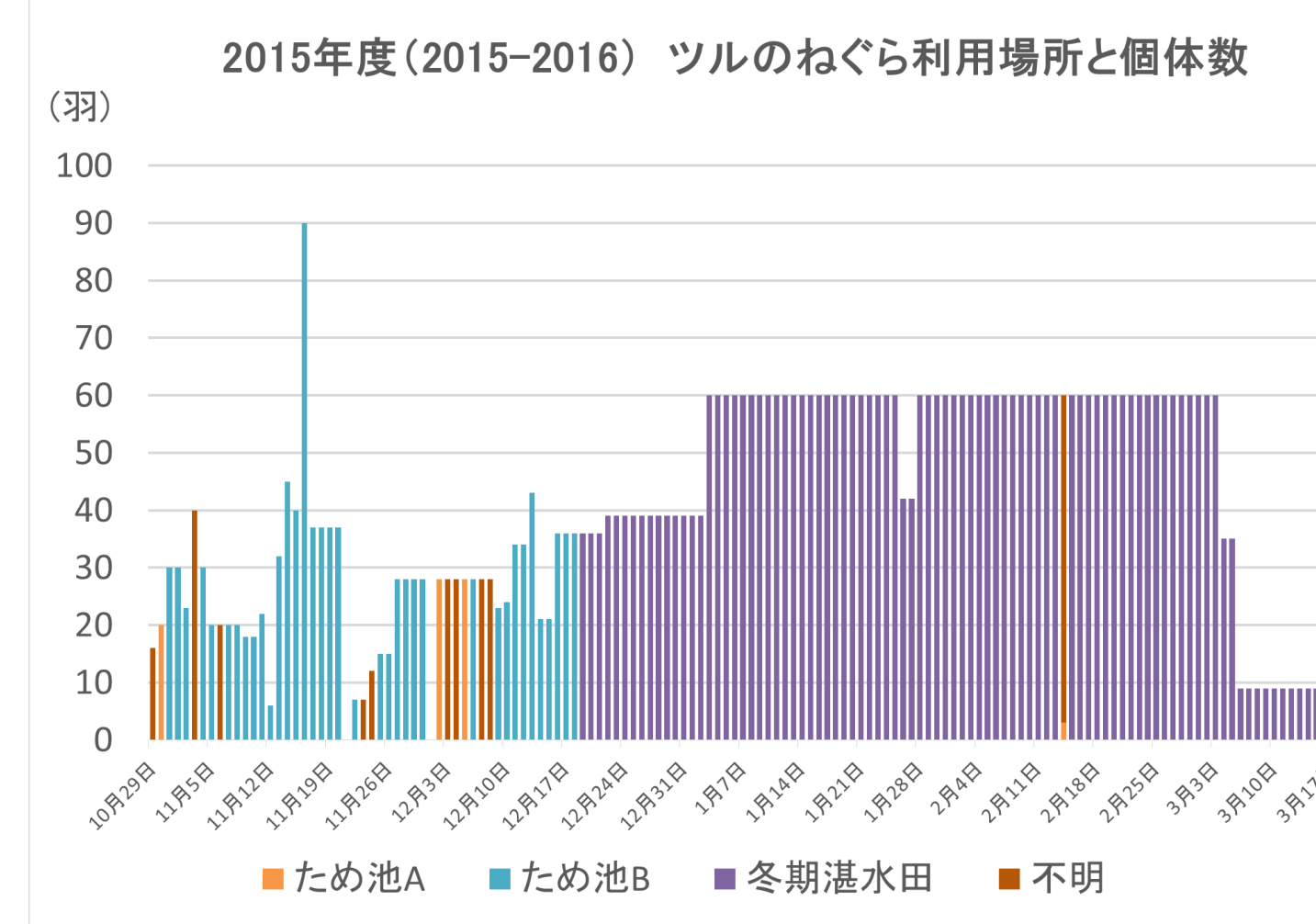
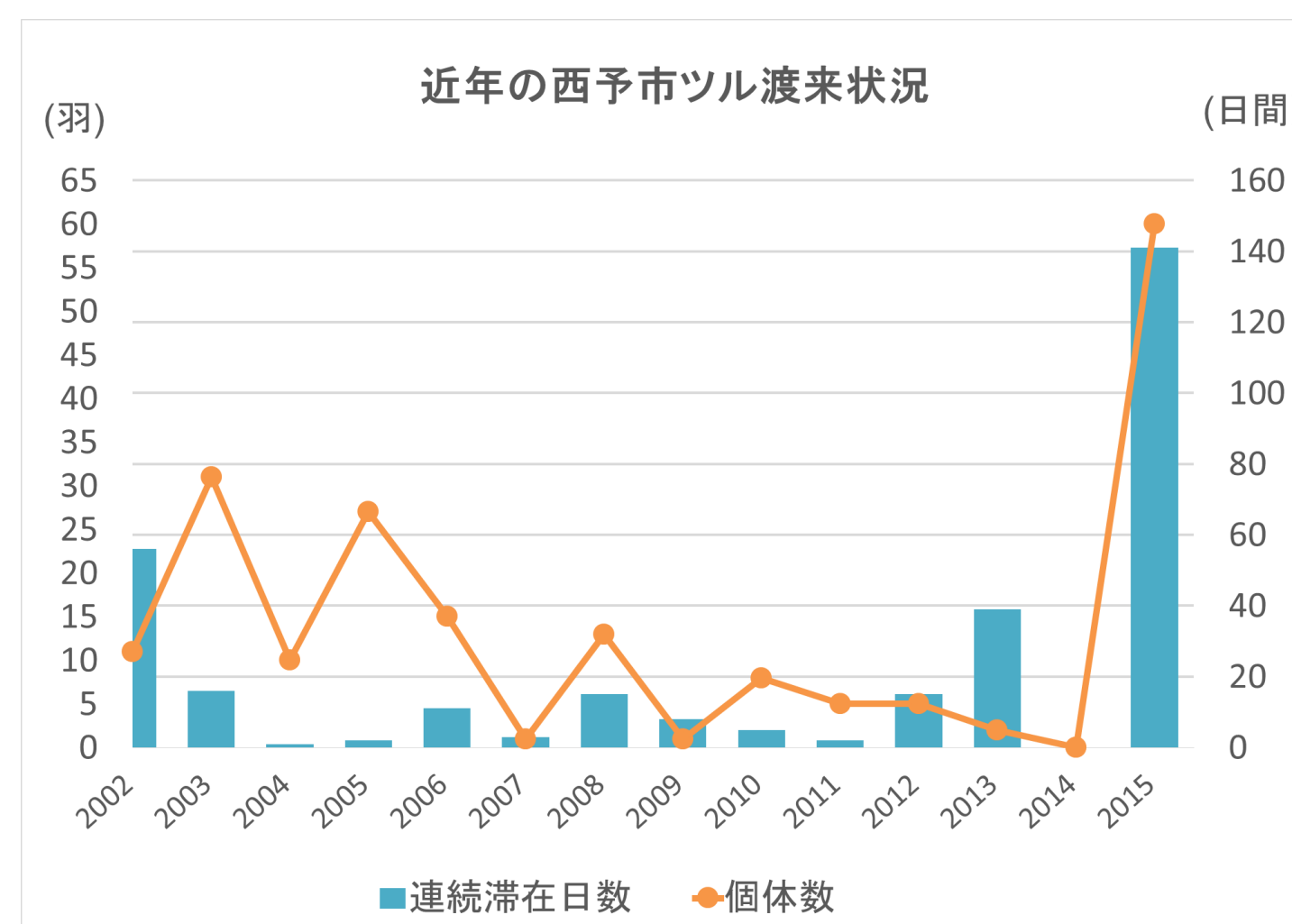
ため池の水位調整及び冬期湛水田の設置によるツルの越冬形成

2015年度(2015-2016シーズン)は、2か所のため池(以下A、Bとする)で冬に工事が予定されていたため、池の水位が低く保たれていた。

10月29日からナベヅルの渡来が確認され、ため池Aでツルのねぐら利用が確認された。Aは、面積が広く、過去にもよくツルの利用が目撃されているため池である。しかし、朝・夕に散歩などによる人の立入りがあるため、10月31日からは、ため池Bを利用するようになった。ため池Bでは、地域住民の協力により、夕方~朝の間、看板と簡易柵を設置し、立入禁止とした。また、12月1日から始まる工事によって、ツルがため池を利用しなくなる可能性が考えられたため、ため池Bの隣接地に冬期湛水田を設置したところ、12月19日からは、設置した湛水田を利用するようになった。

ねぐらの確保とあわせて、採食地でのマナー啓発も行うことで、60羽のナベヅルが10月29日~3月17日まで合計141日間にわたり、長期滞在した。

これは、西予市の近年における記録の中では、過去最長の滞在日数及び最多の越冬個体数となった。また、環境省による平成27年度ナベヅル、マナヅル全国飛来調査(出水以外を対象)において、最多の越冬数となった。



2015/11/12 6:21 ため池B ねぐら利用の様子(望遠レンズにより撮影)



2016/1/20 16:48 冬期湛水田 ねぐら入り直後の様子(センサーカメラによる撮影)

今後の展開

ツルのねぐらに適した水辺環境は、全国的に少なく、越冬地形成の大きな課題の一つになっている。低水位の水辺環境を創出することは、浅瀬を好む水生昆虫や植物、水鳥等の生息場所にもなる。今後は、地域住民と協議しながら、ため池の水位調節や冬期湛水田の設置に取り組んでいきたい。また、当該地では、2015年度に愛媛県の中山間総合整備事業の一環として、ため池内にツルのねぐら利用を目的としたビオトープを造成した。2016年度以降のツルの利用状況についても調べていきたい。